

JICA OB の見た豪州稲作
A view for Paddy field in Australia

石井 宏
Ishii Hiroshi

序章

私は JICA 専門家として 1981 年から 3 年間、マレーシア国水田の灌漑効率向上の助言のために同国の農業省に派遣された。偶然にも同省は水田灌漑その他の案件について豪州のコンサルタントに諮問していた。私はこの案件に直接の関係は無かったが、「米づくりの経験がない白人がどうして水田の灌漑問題を解決できるのか」と不思議に思えた。爾来 20 年を経過して私の満 80 歳を記念して豪州米栽培状況の実態を見聞したので報告する。

水稻農家での経験

豪州の東部を南北に走る大分水嶺を水源地帯とするマランビジ川・マレー川は合流して中央低地を西南に流れてインド洋に達する。この両河川の流域に展開するマレーバレー・コレアンバレー及びマランビジーの 3 灌漑区域の約 48 万 ha の水田で州のほぼ全量の米を生産している。私はマランビジ川灌漑区域のリートン市(ニューサウスウェールズ州)にある Mr & Mrs Mary Ryan 宅に宿泊して近辺の農業作業の実態を視察する事が出来た。同家では水稻のほかに麦・肉牛・山羊を飼育し、所有する耕作面積は約 4,000ha である。その内の水田耕作は数年に一度の割合で行われている。水稻の播種は小型飛行機会社に依頼して、10 月から 11 月の初旬に実施される。その後 165 日乃至 180 日を経過して翌年 3 月・4 月にコンバインで一斉に収穫が行われる。

Ryan 家の灌漑方法は、付近の河川から 18 インチの自家用ポンプで電力揚水し、専用の土水路を経由して下流の水田に配分されている。土水路から水田への分水は、水路を横断して設置された自家製の鉄製の水門を利用している。水門は幅 10cm 程度の数枚の「角落板」の操作により水量の調節をしている。水位の目安は、水田に突き刺した竹棒に添って自由に上下するプラスチック空瓶の黒いテープを遠くから判断している。

私が視察した 1 月中旬は稲の「出穂期・開花期」で、一方休耕地は草原と同様でその中に点在する林地はカンガルー其の他の動物の休息地となっている。土壌は概ね褐色粘土で、処々に砂質土地域が点在している。この砂は猛烈な風的作用によって堆積したものと説明であった。この飛砂現象は同家にある数葉の風景写真で納得できた。広大な農地の一角に自家用の「ガソリンスタンド」があり、大型の農機具が日々街に出掛けて給油する必要はない。更に荒野を進むと三基のサイロが現れた。其の中の一基は「白色顆粒状」の窒素肥料塔である。(300kg/ha 散布) 此処から可動式散布機を利用して農地への科学肥料の散布を効率的に実施するとの説明である。他の除草作業にも農薬を使用して効率的に実施している。

元福島県農地整備課長

キーワード 灌漑排水

リートン市観光局

日本語の名刺を持つ局のガイド氏の(但し独特の豪州英語だけを話す)「Graham Mills」氏の案内で、リートン市一帯の灌漑組織・水稻栽培・小麦類・柑橘類・ワイン用葡萄等の農産物の集荷・貯蔵・出荷施設等の現地調査を行った。

地域の年間降水量は400mm前後で、不足分はBurrinjuckダム(貯水量103万 megalitres)と Blowering ダム(貯水量163万 megalitres)から補給されている。この両ダムの貯水量を「シドニー湾の5倍」と表現しているのはお国がらで面白い。両土水路1,884km・concrete水路263km・pipe line 44km等の施設により末端圃場(12万 ha)までの灌漑組織は完備している。

豪州の米生産者数は約2500戸でその生産面積は15万 haに達する。地域の単位面積当たり収量(籾)は約10ton/haに達している。品種は中粒種が主流でタイ米のような中粒は20%程度である。日本人好みの「コシヒカリ」も栽培されているが、僅少である。

収穫された米はその全量が(120~130万トン)「ライスマーケティングボード(RMB)」が所有する倉庫に搬入する規則になっている。

生産者の意見を代表する組織として「生産者協会」がある。

また、米の集荷権・専売権を認められた農協組織とし「ライスマーケティングボード」がある。

「米生産組合会社 通称 Sunrice centre」では精米・加工・包装・販売の実務を分担している。日本向けの豪州産米の宣伝資料に日本語のTVを用意していた。

米産業調整委員会 米に関する政策全般について協議する。

以上のような各組織をフル回転して生産された米は殆どが海外(中近・エジプト等)に輸出される。即ち米は金額ベースで、1位麦・2位葡萄(葡萄酒)に次いで豪州政府の主要戦略の輸出品目である。但し米の国内の年間の消費量は21tonで、一人当たり換算は10kg程度に過ぎない。

JICA OB が見た豪州の稲作状況

アジアモンスー地帯の稲作農家の一戸当たりの耕作面積が概ね1~2ha程度である。この程度の面積の水田から収穫できる米の量では大人数の家族の食糧を賄うことが可能としても、農家が他の産業・職業に飛躍するのは困難である。一般にJICA専門家は任国の政治・宗教の枠内での収穫増加の技術的助言を求められているに過ぎない。従って伝統的な「米づくり」を梃子にしてダイナミックな産業転換を図ることは不可能である。一方、オーストラリアが進めている多収穫至上主義と有機農業思想を無視した多角的・戦略的な「米づくり」には、従来のJICA専門家の技術手法とは次元が異なるので別の比較基準を研究する必要があろう。

以上今回の現地調査に当たっては、農業工学研究所増本隆夫室長並びに在シドニー日本国総領事館勤務の大谷浩司様の多大なる御指導を賜ったことを記して謝辞に代えます。